

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り複製および再配布することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：

The University of Tokyo 学術フロンティア講義 2024 伊達 聖伸



東京大学東アジア藝文書院

2024年度Sセメスター学術フロンティア講義/高度教養特殊講義（東アジア教養学）

学術フロンティア講義「30年後の世界へ——ポスト2050を希望に変える」

「ロゴスの複雑化、世界をあらわす（表す／現す／著す）ロゴスを豊かにする」

100年前の日仏交流と平和思想——「気象台」としての宗教学



伊達聖伸

フランス語部会／地域文化研究分科・フランス研究コース



姉崎正治(1873-1949)

TOKYO, LE 12 déc. 1922

Cher Monsieur

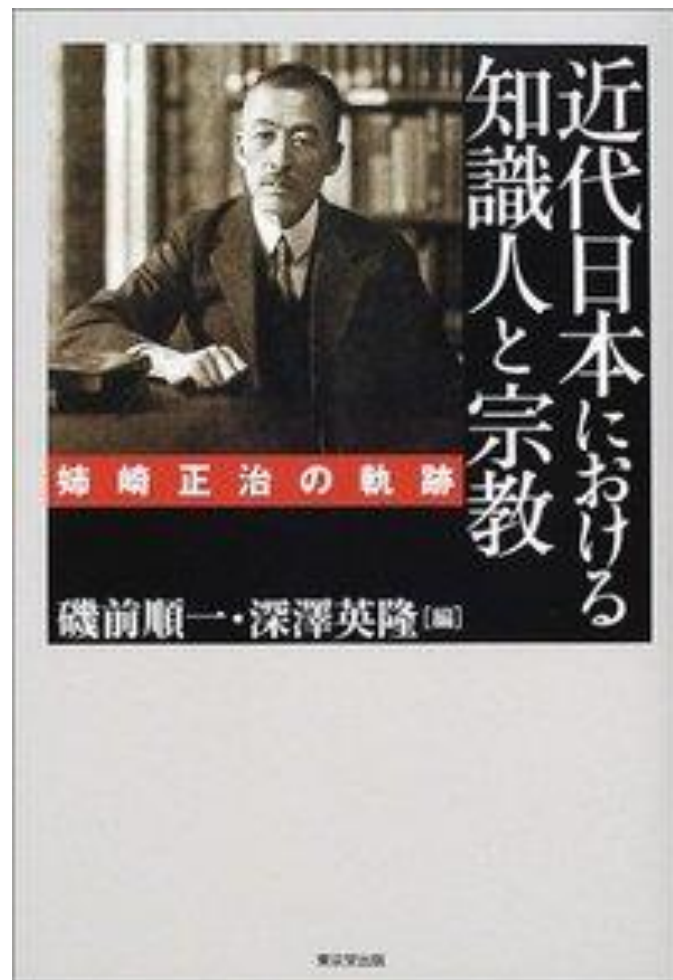
Je viens de prendre con-
naissance de la traduction de
votre discours que M. Bonmar-
chand vient de terminer pour
l'envoyer à Paris et j'ai tenu à vous
exprimer tout de suite mes remer-
ciements et mon émotion pour
les termes si nobles et si élevés
dans lesquels vous avez parlé
du caractère moral de Pasteur. Les
certaines personnes ont admirabi-
lement parlé de son œuvre et de ses
travaux, mais vous avez réel-
lement fait comprendre l'âme et
notre grand respect.

Très très à vous, cher Monsieur,
l'assurance de mes sentiments les
plus sincères. A très
votre dévoué

Clair

Cla[] (在日仏大使館)

磯前順一・深澤英隆編 『近代日本における知識人と宗教
——姉崎正治の軌跡』 東京堂出版、2002年、356頁



「姉崎正治関係資料」書125
(東京大学宗教学研究室蔵)

著作権の都合により
画像を削除しました。

<https://www.mfjtokyo.or.jp/events/symposium/20240307ter.html>

渋沢栄一(1840-1931)
「近代日本資本主義の父」
『論語と算盤』(1916)
道德経済合一説



見城 悌治 責任編集・編著
「帰一協会の挑戦と渋沢栄一
グローバル時代の「普遍」をめざして」
ミネルヴァ書房(2018)

帰一協会(1912) 万教帰一

→日米関係委員会
太平洋問題調査会



「現在の宗教学を志す人は、かれ〔姉崎〕の50冊をこえる著書、数百種の論文のどれをも、読まないで通り過ぎてかまわない」（柳川啓一『祭と儀礼の宗教学』）

「僕の考では講師を使うには教授を使うよりも遠慮しなくてはならん。見玉へ、講師は教授会の事について何らの権利ももっておらんではないか。俸給の点からいっても無給のさえあるではないか。講師は教授に比すればかくの如く特権が与えられておるのであるからして、講師の方では担任以外の事を命令的に押しつけられてヘイヘイいうだけの義理がないじゃないか」（『漱石書簡集』 1906年2月15日）。

姉崎「余は悟れり洋行留学は玉手箱なりき」⇔ 鷗外「洋学の盛衰を論ず」（1902）

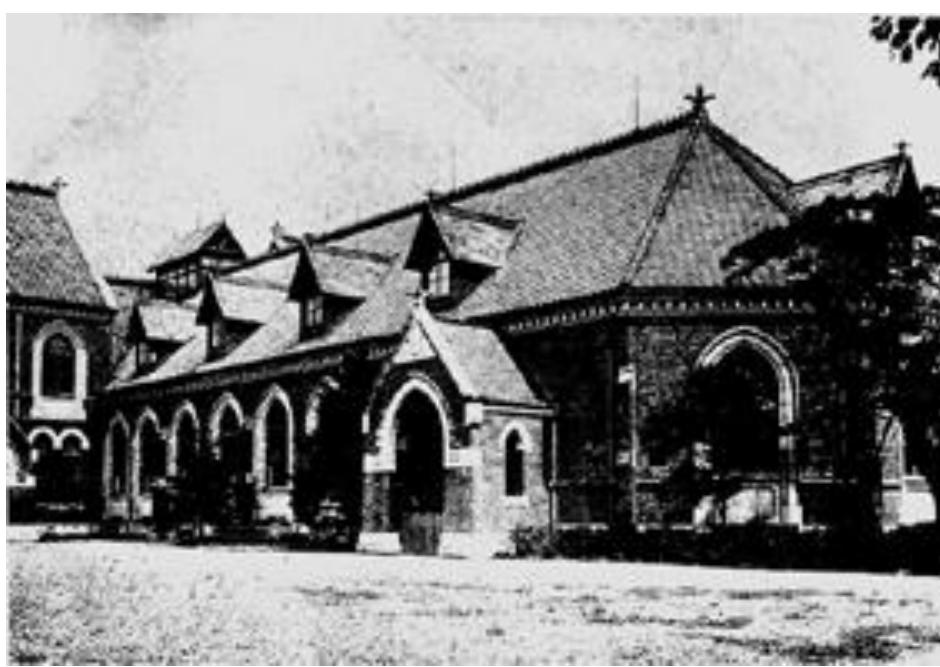
「夢伯林士」姉崎の失望



ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の図案をもとにした「黄禍論」の寓意画
ヘルマン・クナックフース

「ヨーロッパの諸国民よ、諸君らの最も神聖な宝を守れ」(1895年)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%BB%84%E7%A6%8D%E8%AB%96>



<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/html/tenjikai/tenjikai95/history.html>



<https://kimino.ct.u-tokyo.ac.jp/14001/>



図書館再建現場での姉崎（1925年4月、文223）

磯前順一・深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教』
東京堂出版 2002年、91頁

近代文明批判

- 1903年 ドイツ留学から帰国
- 1904年 『復活の曙光』
「戦へ、大いに戦へ」
- 1905年 東大宗教学講座開設
- 1907年 2度目の洋行 日仏協約
- 1909年 『花つみ日記』

「カーン研究員としての世界旅行中、痛切に現代文化の性質と運命といふ問題にぶつかり……問題は、人間文化の変化の上に、宗教的な信仰又理想が如何なる働をするか、宗教と一般文化との相互関係如何といふ方に傾注して、今日に至った」（「宗教学講座二十五年の想出」1931年、9頁）

柳川啓一：「官」の科学と「野」の科学

- ・姉崎正治＝「官」／柳田国男＝「野」(?)
- ・「軌道をはずれた」

— 花 つ み 日 記 —

去年の旅行をさせてくれたカーン氏(M. Albert Kahn)に對する感謝をも表しなければならぬ。氏が世界巡回資金(Le bourse pour la tour autour du monde)を諸國の大學に寄附し、學者をして世界を巡つて諸國民の事情を研究せしむる様にせられた趣意は實に人道のため世界平和のためである。各國民の事情が學者の研究で互によく知れ亘り、各國の學者間に互に同情が出來たならば、終には國際の誤解を防いで戦争などの慘禍を避け得る様にもならう。こゝにいふ理想に出た寄附に依つて再度の外遊をなし得た自分は、宗教や文明について視察し研究すると共に、親しく接した人々に心情を打ちあけて語り、東西文明は異つても人情は同じであるといふ事を少しでも示したいと考へた。それと同時に西洋の文明や人情についても見た事を本國の同胞に報告するのを義務と考へる。この考で一年餘の旅行中書き集めた日記や書類は甚だ多いが、今一時にそれを公にし兼ねるた

祭と儀礼の宗教学

柳川啓一



世俗化時代の日本人の宗教的メンタリティ

大衆化社会の現実によって、宗教は世俗化した。その世俗化にもかかわらず、あるいは世俗化することによって、聖なるものと俗なるもの、祭、儀礼などの宗教現象への関心はかえって強まっている。本書は(都)の宗教学の視点から、世俗化時代の日本人の宗教意識を解明する。 筑摩書房 定価2200円

柳川啓一「ゲリラ宗教学」

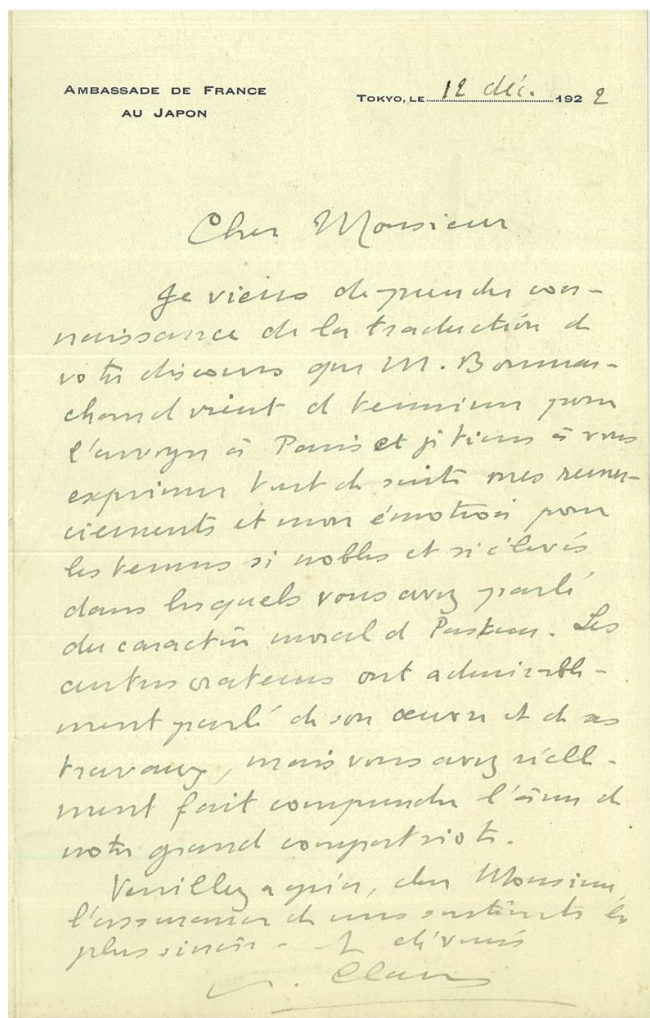
「「ゲリラハ、単独又ハ小部隊ノ行動ニヨリ敵ヲ奇襲シテ小戦果ヲアゲ迅速ニ退却スル」。ここが大事な所で、戦場に長く留まっていたはいけない。社会学とか心理学とか其の他何々学という正規軍がいて、調査・実験の正確性とか、役割構造・因子分析とか、土語を習得して一年滞在とかうるさいことを言い出したらさっさと引き揚げるべきである」(8頁)。

柳川啓一「祭と儀礼の宗教学」

筑摩書房 1987年

姉崎正治「参謀本部」と「気象台」

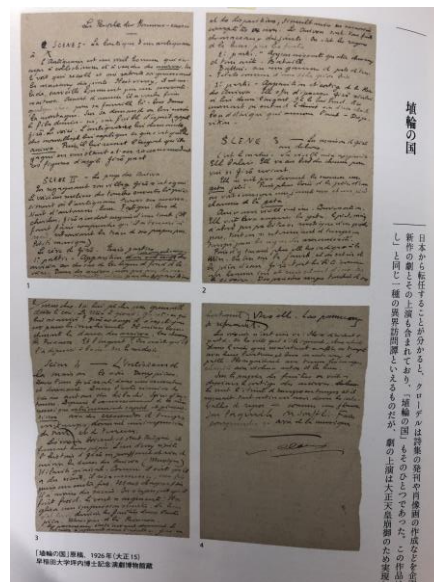
「吾々の同僚のうちには、大学で一つの講座を持つという事は、その学科に関するすべての権能を握ったように考えて、巨細にその学科に関する事柄を指令している人もいた。いわば、参謀本部があって、その計画に従って軍が動く様に、学科に関するすべての事柄、訳語までをそこで統一してゆこうという考で、それを殆ど軍備の計画の様にした人もある。自分の考はそれとは全く別で、参謀本部の代りに、いわば気象台の仕事をするのである。つまり、気象の変化を観察して、その状態を予測する事が学問上の職務であると考えた」(『新版 わが生涯』1974年、108頁)



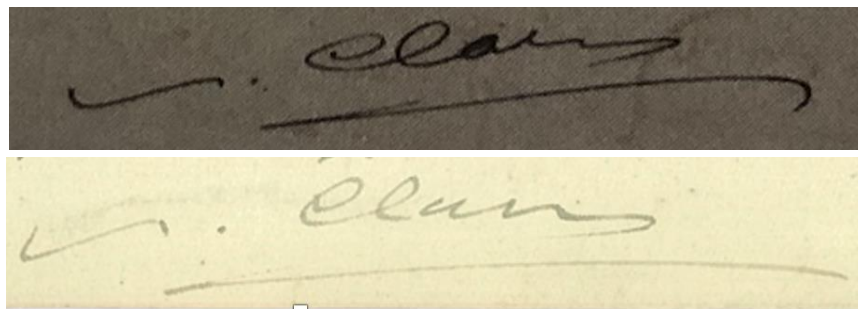
「姉崎正治関係資料」書125
(東京大学宗教学研究室蔵)

Cla[] (在日仏大使館)

磯前順一・深澤英隆編 『近代日本における知識人と宗教——姉崎正治の軌跡』 東京堂出版、2002年、356頁



『詩人大使ポール・クロードルの日本』 水声社、2018年、85頁



「あなたがパストゥールの道徳的性格について語っている非常に気高く高尚な言葉に感銘を受け、感謝の気持ち表したいと思います。他の人たちもパストゥールの業績と仕事について立派に語りましたが、あなたは私たちの偉大な同胞の魂について豊かな理解を与えてくれました。」

【記念式典挨拶】

長与又郎（病理学者・癌研究の世界的権威）

北里柴三郎（医学博士）

矢部辰三郎（海軍軍医：パストゥール研究所出身）

ポール・クロードル（駐日フランス大使）

【記念講演会】

松原行一（化学者・有機化学）

「パストール先生の化学方面」

鈴木梅太郎（農芸科学者）

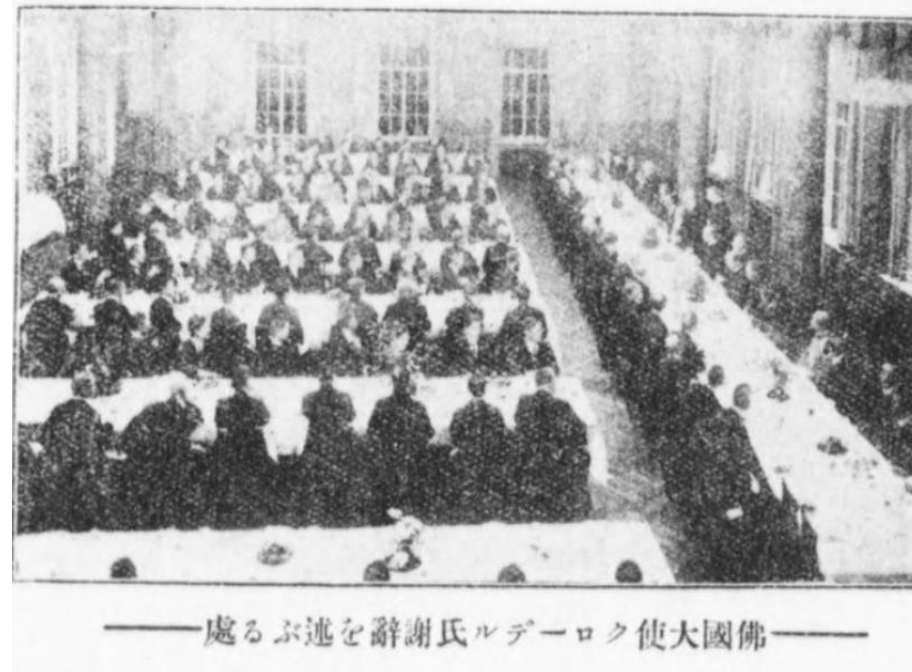
「パストール先生の醸造及蚕業方面」

三浦謹之助（医学者・内科学）

「パストール先生の医学方面」

姉崎正治（宗教学）

「ルイ・パストールとフランス魂」



「床しき偉人追慕の會合」（パストール翁誕辰百年祭）
『醫海時報』1483号、1922年12月2日、2253頁。

「人間相愛の心、人類結合の心をパストールは、病に悩む人間に向つて熱中発表した。〔……〕彼の発熱は、維摩居士が「衆生病めり、故に我れ病む」といつたと同じ人類に対する慈悲同情の熱であつた」。

「パストールは又真に心情ある愛国者であつたが、彼の愛した祖国は富国強兵のフランスでなく、文化のフランス、科学芸術のフランスであつた」

パストゥール

斜めに一步踏み出す移動

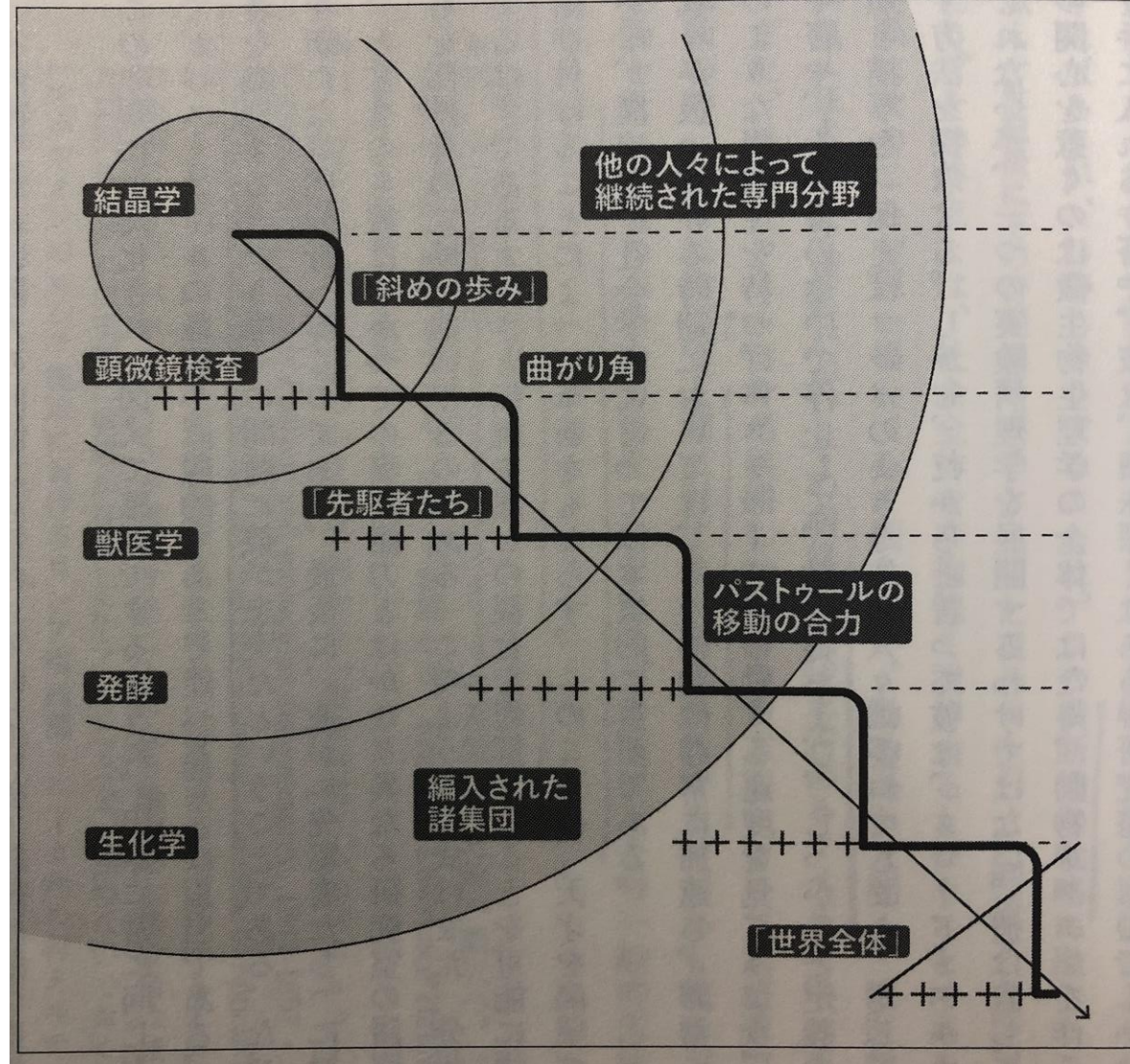


- ・有機物と無機物を見分ける
- ・発酵の研究(低温殺菌法)
- ・自然発生説の否定
- ・蚕の病気を解明
- ・伝染病対策(ワクチン予防接種)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AB%E3%82%A4%E3%83%BB%E3%83%91%E3%82%B9%E3%83%84%E3%83%BC%E3%83%AB>



図1



ブリュノ・ラトゥール『パストゥールあるいは微生物の戦争と平和、ならびに「非還元」』荒金直人訳、以文社、2023年、141頁。

「我々は、我々の世界を構成する行為者たちが誰であるのか知らない。この不確実性から出発して、他の行為者たちを招集してそれらに各々の意志や戦略を付与することを通じて、如何にして行為者たちが少しずつ相互に規定し合うのかを理解しなければならない。行為者たちの数が突然数百万という規模で増加している時代を研究する場合、この方法上の規則は特に重要である。『科学論評』の全ての執筆者に衝撃を与えたことを一文で要約することができる。それは、「我々は思っていた人数ではなかった」ということである」（78）。

「誰のために「場所を空ける」必要があるのだろうか。偏在し、恐ろしく効果的で、しばしば危険で、全く目に見えない、無数の微生物のために、である。しかしそれらは目に見えないので、微生物の提示者たちにも場所を空ける必要がある」（86）。

「最も重要なのは、いわゆる政治的な空間をこれまで記号化してきた諸源泉に還元することのできない、権力の新たな源泉と正当化の新たな源泉を、彼ら全員が作り出しているということである。彼らは新たな諸力を用いて政治的な相互作用を徹底的に刷新するのだから、その彼らを「社会的または政治的な説明」に還元することはできない」（90）。



姉崎正治「適者生存の真意義」『実業の世界』14-22、1917年

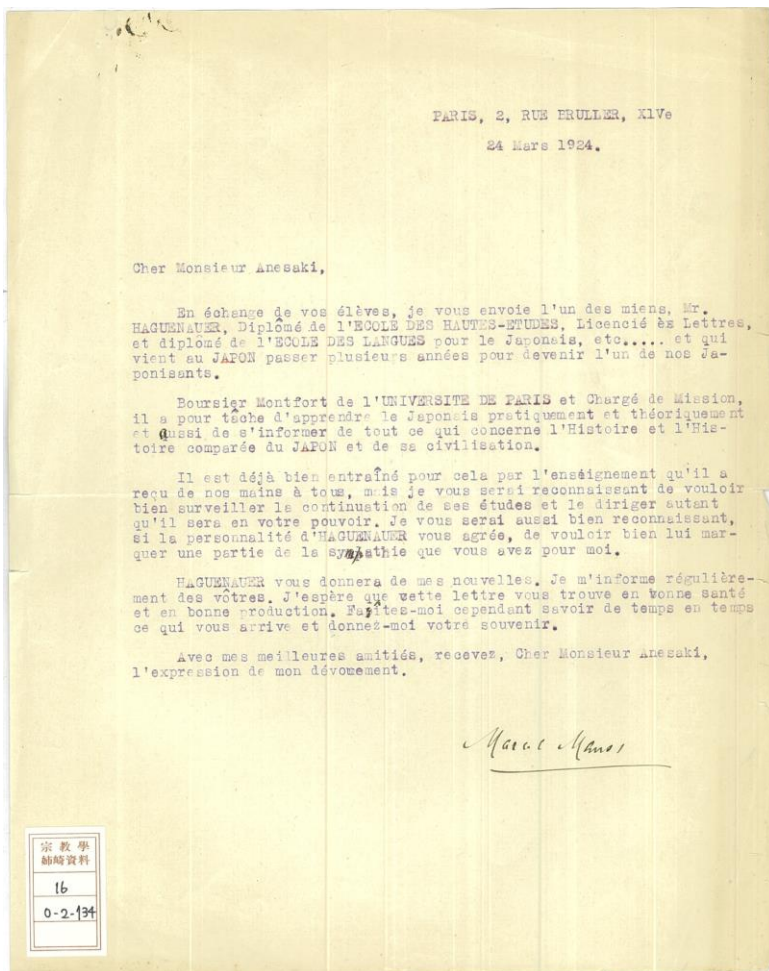
ダーウィン「適者生存」：経済力・軍事力？／知力・同情の力

姉崎正治「人生の改造と弱者の力」(1920年)『中央公論』380号、1920年

「十九世紀の文明は、権力、武力、財力を兼ね具へた者を**主動者**とし、而して思想の上では、ダーウソンの学説を誤解濫用した生存競争説に基づいて強者の権利といふ觀念を中心とし、科学といふ智力をも権武財三力の手足に使つて出来上つたものである。〔……〕財力本位の強者文明、資本本位の産業組織が、今のままで存続し発達するとは考へられない。破滅か改造か、ここに現代の最も興味なる事実が存する。〔……〕此の改造に**弱者の力**が大いに加はるのは、即ちそれが**強者文明の轉換乃至破滅**が近づいて来たからである」

「**弱者の生活**を見るに、彼等が自分の人間としての品格と権利と責任とを自覚しない間、即ち奴隷根性に甘んじて居る間は、強者の寵遇を得る為に、弱者自らの間に相互打撃をやる。〔……〕然るに、弱者ながらも自分の品格を自覚し、自由の理想を味ふに至れば、弱者の間には、最も美はしい**相互扶助の道德**を現出する」

マルセル・モース発姉崎宛書簡



「姉崎正治関係資料」書413
(東京大学宗教学研究室蔵)



宗教生活の原初形態

(上)

デュルケム著

古野清人訳



宗教とは、社会における「聖」と「俗」の典型表象であり、社会そのものに根ざすものである。デュルケム(1858-1917)は、オーストラリア原住民のトーテムを考察の対象としてとりあげ、宗教の社会的起源・機能を説明してゆく。宗教現象の研究に社会学的方法の規準を適用して、科学的基礎を与えた名著。(全2冊)



白 214.1
岩波文庫

デュルケム「宗教生活の原初形態(上)」古野清人訳 岩波文庫 1975年

1924年3月24日

あなたの教え子と交換する形で、私の教え子の一人であるアグノエル氏を派遣します。彼は高等研究院を卒業した文学士で、東洋語学校も日本語で卒業しました。日本に来てこれから数年を過ごし、私たちの日本の専門家の一人になるでしょう。

〔.....〕

もしあなたがアグノエルの人柄を気に入ってくださるなら、私に対して示してくださったような共感を、彼に対しても示してくださるとありがたいです。

国際連盟に期待していたモース

2つの社会主義：

- ・ **マルクス・レーニン主義**
(ボリシェヴィキ)
- ・ **共和主義的社会主義**
(ジャン・ジョレス)

インターナショナル

- ・ プロレタリア社会主義の国際組織
- ・ 「間国民主義」「間ナション主義」

カント：

国際法は国際的に統一された一国家ではなく、自由な諸国家の連合に基礎を置くべきである（『永遠平和のために』1795年）

「国際的な連合」**Völkerbund**

サン・ピエール → ルソー → カント



Martin Grandjean, CC BY-SA 4.0,
via Wikimedia commons



姉崎正治「文化問題としての国際連盟」
『国際連盟』1-1、1920年

「**少数者**が感じ初めた感動、懐き初めた思想が生長して、一時代、或は世界全体を支配する様になる。其事実の一例として、**国際連盟**を挙げる事が出来る」

「国際連盟が出来れば、それで直ちに世界平和が来ると考へて、それで之を歓迎するが如きは、言はば一足飛びの考であつて、やはり人間社会の複雑な進化を無視した考である。之に反して国際連盟が出来たとて戦争はやむ者ではない、それ故に連盟は少くとも無益、無用の者だとして仕舞ふ如きも、同じく一足飛びの偏見である」

「今日できた連盟そのものが、此の如き文化の理想を完全に表現し、又十分に実行するとはいはないが、ここにその理想希求の一端が事実組織となつて現はれた所に大な文化的意味を発見せざるを得ない」

憲法9条の 思想水脈

山室信一

日本國憲法

第二章 戦争の放棄

第九條 日本國民は、正義と秩序

を基調とする國際平和を誠実に希求し、國權の発動たる戦争と武力による威嚇又は武力の行使は、國際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。國の交戦權は、これを認めない。

山室信一「憲法9条の思想水脈」
朝日新聞出版 2007年

「私は力について、もっとリアルに考えていかねばならないだろうと思います。力にはさまざまなタイプがあるのです。」

「九条における戦争の放棄は、国際社会に向けられた「贈与」なのです。」

「私は憲法九条が日本から消えてしまうことは決してないと思います。たとえ策動によって日本が戦争に突入するようなことになったとしても、そのあげくに憲法九条をとりもどすことになるだけです。高い代償を支払って、ですが。憲法九条は非現実的であるといわれます。だからリアリスティックに対処する必要があるということがいつも強調される。しかし、最もリアリスティックなやり方は、憲法九条を掲げ、かつ、それを実行しようとすることです。九条を実行することは、おそらく日本人ができる唯一の普遍的かつ「強力」な行為です。」



柄谷行人「憲法の無意識」
岩波書店 2016年